

## 日本近代農業史における民間農法・有機農業の位置づけをめぐる諸問題 (2) —黒澤浄の事例を中心に—

### Questions about the Evaluations of Indigenous Farming Methods in the History of Japan's Modern Agriculture (2) : The Case of Kiyoshi Kurosawa

古田 睦美\* 下里 俊行\*\*  
Mutsumi FURUTA・Toshiyuki SHIMOSATO

#### 目次

はじめに

1. 日本近代農業史での民間農法の位置づけの概観
2. 1950年代前半における黒澤農法に関する言説 (以上 前号掲載)
3. 1970年代初頭の無農薬農法の全国聞き取り調査 (以下 本号掲載)
4. 農業近代化の枠外にある民間農法の再評価  
おわりに

#### 3. 1970 年代初頭の無農薬農法の全国聞き取り調査

後述するように、中島紀一によれば、黒澤式稲作法は1954年にその社会的影響力に終止符が打たれたとされる<sup>1)</sup>。だが、実際には、例えば、1978年5月に黒澤は長野県の産業功労者として知事表彰されており<sup>2)</sup>、本論冒頭で紹介したように彼の農法は福島県の有機農家・丹野喜三郎氏によって継承されている。これらの事実だけでも、1970年代以降も黒澤浄の社会的影響力は持続ないし復活していたとみる必要があるだろう。その要因は、同時代の化学肥料・農薬多用の農業に対する否定的評価の台頭であったことは間違いない。

そこで、次に、1970年代初頭に協同組合経営研究所によって実施された無農薬農業の事例収集と其中で報告されている黒澤農法について分析する。協同組合経営研究所とは、1952年設立され1972年に改組されるまで存続し、現在はJA傘下のJC総研として存続している。この研究所は、1970～71年に「無農薬農業」の実践者たちについて調査し、その報告「無農薬農業の事例をたずねて」を『協同組合経営研究月報』（第207号、第215号）に掲載していた。この調査が発表された1971年は、協同組合経営研究所・理事長であった一楽照雄が、「有機農業研究会」の結成よびかけた年でもあった。この研究会には代表幹事として塩見友之助（元大東亜省調査課長、元農林事務次官・農業改良局長）、事務局長として築地文太郎（協同組合経営研究所・研究員）が選任されており、協同組合経営研究所と有機農業研究会とは密接な関係にあった。同研究所・理事長・一楽照雄は、同じ時期に『月報』に掲載した書評において自分の思想を次のように表明していた。すなわち、「かね儲け」主義の農業に対して、じつはそれを批判する「進歩派ないし反体制派と言われる人々の展開する理論も、やはり近代化とか企業化を根底にするのが常である」と指摘し、「経済学の眼」ではなく「総合の視

\*環境ツーリズム学部教授

\*\*上越教育大学大学院教授

野」をもったヨーロッパの農民の「主体性ある生き方」が理想であると述べている<sup>3)</sup>。ここには、資本主義のあり方と同時に反資本主義運動・社会主義体制の双方に共通するパラダイムとして経済的価値を一元的に重視するような「近代化」への批判意識をみることができる。また一楽の有機農業思想の背景には、田中正造の思想があったことが指摘されている<sup>4)</sup>。

先に一楽が書評した守田志郎の『農業は農業である』(1971)は、農業の近代化=資本主義化の典型とみなされていたヨーロッパの農業の実態が、当時いわれていたほど「農民層分解」や機械化・企業化の方向に向かっていないことを指摘したものであった。彼が念頭においていたのは、加用信文を典型とする農業における世界的法則<sup>5)</sup>を信奉していた農業経済学者であったと解釈することができる。守田は、次のように賃金労働者主体の社会変革像を批判していた。「ところで私は、労働者と農民が同じような階級的な利害の上に立って闘うべきだなどという口上は、いくらくり返してもどこにも通用しないものだと思っている。農家というものはどんなに小さくても一城の主(あるじ)であり、そこに農業という工業ではえられない自然のいとよみのとり組みを成立させるときの限りない興味と可能性のすばらしさがあるのだという<sup>6)</sup>。守田は、「拒む農業」を提起し、「一つは商品に対するもの」、「他の一つは、外部からの考え方に対するもの」に対して拒絶することを農家の生産と生活を守る方法だと主張した<sup>7)</sup>。この守田の著作の意義を室田武は次のように解説している。「解説者の私見からすれば、『資本主義』という概念は、半面では経済社会の実体をとらえているのにちがいないが、他の半面では一つの虚構(フィクション)に過ぎない。地下の鉱物資源に基づいて展開される機械制の工業生産は、確かに資本主義的に営まれうるであろうが、生態系(エコシステム)の内部で営まれる農業は、利潤動機に依拠する資本主義や、国家計画に依拠する社会主義の制度になじまない。つまり、農業は農業として、それ自体、人間の一つの生活形態なのである。おそらく、このことを指して、守田は、農業は農業である、と言っているのであろう<sup>8)</sup>。こうしてみれば、一楽の「近代化」批判と有機農業の思想の背景には、同時代の二つの近代化、つまり資本主

義経済における農業の商品経済化と、国家社会主義経済における農民の賃金労働者化の双方に対する抵抗の姿勢があったことがわかるのである。

ここで、調査報告の全体像を分析する前に、研究所の研究員たちの取材にあたっての姿勢・思想を特徴づける言説を分析することで彼らの動機・思想を析出しておきたい。例えば、築地研究員は、埼玉の須賀一男氏の無肥料による「自然農法」に関する質問のなかで、「肥料をやらないというのは略奪農業になると理解してもよいのですか」とか、「土の育成力と作物の生長量との差がマイナスでは略奪になる」という見解を示したうえで、「須賀さんの農場の位置は[⋯]川砂が堆積した細砂土であり、[⋯]有機質が多いので例外的に]無肥料でもとれるのでは、と思った」と感想を述べている<sup>9)</sup>。すなわち、築地が、無肥料農法に懐疑の念をもっていたことが示されている。また、八重島研究員は、「ここ一、二年の『公害問題』ブーム<sup>10)</sup>について言及しており、この時代の食品汚染・公害病裁判の隆盛という状況が、無農薬農業への関心の背景にあったことを示唆している。また、平井研究員は、自然農法による玄米と比べ、多肥農薬による玄米が「異様に腐敗している実態」に「慄然」とし、「自然農業」を手がかりにして無農薬農業を「もっと民衆のものにすることが必要であろう<sup>11)</sup>」と感想を述べている。ここには、民衆に学びつつ民衆を導くというこの時代の研究者特有の使命感が表現されているといえよう。

協同組合経営研究所の調査結果の全体像については次の表3のとおりである。

ここには、今では著名な農業者も少なくない。なお、自然農法の背景として世界救世教が少なからぬ役割を果たしていたことに注目する必要がある。すでに1953年の調査で「メシア教式」として調査対象となっていた農法である。つまり、農業近代化のモデルの枠をはみ出るような民間農法が発生した背景には、純粋に技術的な関心からだけでなく独自の世界観をもった宗教的・思想的な要因が大きく作用していた側面を確認する必要があるだろう。世界救世教とは、1935年に大本教の信者の岡田茂吉が観音の霊力による独自の信仰治療を中心として創始した新宗教のことで、肥料農法の弊害を警告して「自然農」法を提唱して、薬禍・薬害を警告しておこなった浄霊活動が当局の忌諱

表3 1970-71年の協同組合経営研究所による全国の「無農薬」農業者の調査対象一覧<sup>12)</sup>

独自農法の開始時期	圃場場所	氏名	農法の自称／思想的背景	主たる生産物	調査担当者
1935年頃	長野県立科町	黒沢 浄	天然農法	米・野菜	滝沢 隆夫
1940年	広島県砂谷酪農	久保 政夫	農薬を使わない山地酪農	牛乳	八重島一政
1947年頃	愛媛県伊予市	福岡 正信	自然農法／東洋的な農法	米・柑橘	木下 泰雄
1947年	岐阜県	杉山伊登吉	自然農法	米・野菜	平井 正文
1949年	富山県	置田 俊雄	自然農法／世界救世教	米・野菜	木下 泰雄
1949年	静岡県	Tさん	自然農法	米・みかん	八重島一政
1957年	埼玉県上里村	須賀 一男	自然農法／世界救世教	米・馬鈴薯・タマネギ	築地文太郎
1959年	奈良県五条市	窪 吉永	健康農法／梁瀬義亮	米・野菜・養鶏	築地文太郎
1962年	茨城県明野町	殿塚 広一	クロレラ飼育	養豚	平井 正文
1970年	岩手県藤沢市	佐藤 一雄	クロレラ飼育／ミチューリン会	養鶏	平井 正文
1970年	長野県大町ほか	長野県農業試験場	安全栽培／農薬害排除／岡田場長	水稻	築地文太郎

に触れて弾圧を受けたという経緯がある。戦後再建されて病・貧・争は靈魂のけがれにあるとし、浄霊により真善美の調和をもたらし地上に天国を築くことを使命として活動をおこなっている宗教団体である。他方、「日本ミチューリン会」は獲得形質の遺伝を唱えたルイセンコ学説に立脚したソ連の育種家ミチューリンによるヤロビ(春化处理)農法を普及する団体として1954年に結成された。その理論的指導者・菊池謙一のもとで「下伊那ミチューリン会」による『講座新しい農業』(理論社、1954年)や日本農業生物学研究会・会誌『ミチューリン生物学研究』(1965-85年)などが刊行されてきた。またクロレラ飼育はミチューリン会の独自農法の一つとされていた。いずれにしても、1970年代初頭の調査において、黒澤浄は、広島の久保政夫と並んで戦前から無農薬農業に取り組んでいた先駆的な無農薬農業の実践者として知られていたのである。

「黒澤浄さん(長野県)の場合」と題された調査報告を執筆したのは研究員の滝沢隆夫であった。吉川勇一によれば、滝沢隆夫は、東京大学経済学部在学中に自治会委員として1952年の東大ポポ

ロ事件をめぐる運動にかかわったことがあるという<sup>13)</sup>。その後、滝田は、協同組合経営研究所へて宮崎産業経営大学(1987年開学)の経営学部教授をつとめた。昭和期の農村・農協問題の専門家、主著は『都市農業と農協』(日本経済評論社1979年)で、農協・代替エネルギーに関する研究論文が多数ある。当時の滝田の思想的立場は、次の一連の言説からうかがい知ることができる。第1に、彼は、黒澤在任の立科町の心象について、「あのセメントと鉄に囲まれた、郊外に出ても、ブルドザーが山の緑を剥いだ赤土の荒廃——あえて荒廃といおう、開発のために農地や林が荒廃されるのだから——を見なれた者にとっては、ほっとするような田園の風景である」と述べている<sup>14)</sup>。ここには農村の都市化(近代化)に対して批判的な姿勢が示されているといえる。また、黒澤浄個人についてのイメージとしては、「黒澤氏は農業というものを実践の中で求めてきた」、「氏は高邁な科学理論は知らないかもしれない」あるいは「人間の体により米はどうしたら作れるかを、80年の齢を重ねた体で知っている」、「金を溜めるといったことには、やや縁遠い」と表現している<sup>15)</sup>。ここ

には、民間農法の実践者についてのロマン主義的解釈を見ることが出来る。つまり19世紀初頭に、理性・理論重視の啓蒙主義への反動として生じた心情・感性・経験・歴史を重視する思想潮流と共通するメンタリティである。あるいは、都市労働者中心の理論重視のソ連型マルクス主義に対抗した、農民中心の実践重視のナロードニキ思想への関心の台頭という時代背景も考慮する必要があるだろう<sup>16)</sup>。第2に注目すべきは、滝沢研究員による「化学肥料」批判の論拠である。彼によれば、「化学肥料を發明した人は、おそらく、化学肥料メーカーを儲けさせようと考えたのではあるまい。[…]しかし結局は、化学資本に利用されてしまう。ここら辺に資本主義の下における学問という問題がある […]」と主張している<sup>17)</sup>。ここには、明確にマルクス主義的な資本主義批判の論理といわゆる「象牙の塔＝アカデミズム」への批判の論理が表現されている。

滝沢研究員による調査方法は、直接、黒澤浄と面談したうえで、黒澤浄の日記『五十年の歩み—私の米作り—』に収録されている黒澤農法の「都々逸」の一部も転載されていることから、黒澤自身から資料提供を受けていることも明らかである。黒澤農法についての評価としては、「戦前から黒沢式農法で有名な黒沢浄氏」と紹介し、地域社会での評価についても「近くの人も先生先生と呼んでいる」あるいは「氏の家へ農協〔の職員〕に案内して貰って訪ねた」とあるように調査以前から著名であったことが伝えられている。黒澤浄の家族の動向としては、当時84歳で、妻・娘とで3反6畝の水田と2反7畝の畑で営農していたことを伝えている。また後継者は不在で、孫は東京で勤務しているということであった<sup>18)</sup>。

次に滝沢研究員が注目した黒澤式農法の特徴について検討したい。第1の特徴は、化学肥料農法への批判である。そして、その根底には「自然科学万能主義」への批判があり、その背景には公害問題が横たわっていた。滝沢研究員が伝えている黒澤の思想は、次のようなものであった。「現代の科学で解明された要素だけの肥料を与えればよいのか」、「科学というものは、解明すればするほどわからないものがでてくる。とくに生物学ではそうである。」とりわけ、「実験室主義」への批判は特徴的である。例えば、「人体に対する影響を調べる

となると、もう完全に、今の科学実験室の中ではお手あげの筈だ。こういった問題は、実際の中で明らかになる。カドミウムを多量に含む水の中で、生育した米を人間が食べば、「イタイタイ病」になる。こういった科学法則は実験室の中ではでてこなかったのだ。」<sup>19)</sup>ここで語られているのは、反科学の思想ではなく「実験室万能主義」への「科学的」批判というべき思想的態度であった。その意味で、黒澤以外の「自然農法」で語られているような全ての生き物の「共存共生」や「生命尊重」や「東洋的農法」、「健康農法」とは異質な思想性がある。具体的にいえば、「人間に役立つ科学は、実験室の中だけからはでてこない」という姿勢は、むしろ「野外科学」、「実践科学」、「総合科学」<sup>20)</sup>といったより包括的な世界認識への志向性を内包していた。さらに「一つの植物を扱うにも、化学から生物学、医学、あるいは光としての物理学と多様な面に渡らざるをえなくなっている。それを一つの科学的観点〔諸科学の一つ分野の観点〕からだけ扱ったのでは、人間に役立つ科学にはなり得なくなってきたのである」<sup>21)</sup>というように科学の実用主義的な理解に立脚した学際的な探求の姿勢が明確に打ち出されている。この点について滝沢研究も着目しており、次のように指摘している。「氏の農法の特質は、化学肥料批判である。排撃ではなく批判であるというところに着目したい […] 化学法則から編み出された化学肥料の害悪についても目を向けている」<sup>22)</sup>というように総合科学的な視点からのセクショナリズム的にタコソボ化した専門科学の現状への批判あるいは学際的アプローチが黒澤農法の根底にあった科学観である。

滝沢研究員が析出している黒澤農法の第2の特徴は、人間中心のプラグマティズムであると定義することができる。滝沢は「天然農法」の具体例をあげ、それが太陽・土・微生物を「利用した農法」である点に注目している。例えば、堆肥と化学肥料とを組み合わせる化学肥料を有効に活用する方法が探求されている。土作りにおいて微生物を重視しつつ堆肥に化学肥料を混入する黒澤農法は、原理的にいえば、無肥料の自然農法と対立するものであった。しかし、黒澤農法では、堆肥に化学肥料を入れると「一時は堆肥の微生物は殺される。しかし、間もなく微生物は繁殖して、化学肥料を食っていく、すなわち化学肥料のマイナス

要素をなくしていく」ので化学肥料の直接施肥より半分で済むという<sup>23)</sup>。黒澤のプラグマティズムは、他にも、土壌の消毒のために焼土を利用する点にも表れている。彼によれば、稲の病気は土が原因であり、土の消毒として3年毎に反当たり焼土2石投入することを推奨している。また大豆の不稔に対しては根粒菌ではなく甘酒の酵母菌を投入することを推奨している<sup>24)</sup>。したがって、黒澤農法における無農薬の根拠も「自然をうまく利用すれば、農薬を使わなくても済む」というプラグマティズムの観点に立脚していた。同じような観点にたつて子供たちからカマキリの卵を購入し畦に刺すことで二化メイ虫の駆除に役立てたり、おたまじゃくしを購入してカエルに成長させ害虫駆除に活用したり、徹底した益虫利用の姿勢をしめしており<sup>25)</sup>、いわゆる生命尊重思想とは異質な姿勢をとっていた。同じように敷き藁による太陽光反射を利用してアブラムシを駆除する方法なども黒澤式の徹底したプラグマティズムの表れであると考えてよいだろう。

黒澤農法の第3の特徴は、労働集約的な農法である点である。黒澤によれば「普通より〔農薬と肥料を使う場合より〕2割ほど労力を多くかけています<sup>26)</sup>、あるいは「労力がかかることがなぜいけないのかともいっている。労力をかけることによって、農薬代も肥料代も節約できている<sup>27)</sup>という。ただし、「その点〔労力をかける点〕で機械利用を〔黒澤〕氏は否定はしていない<sup>28)</sup>という点にも注目する必要がある。つまり、黒澤農法の労働集約主義の思想には、労力投入による生産における貨幣経済からの撤退、自給的領域の拡大という志向が根底にあったと考えてよいだろう。

他方で、この労働集約主義は、生産物の販売、商品化において投下労働のコストに見合う収入が確保されるという見通しに立脚していた。これが、黒澤農法（経営）の第4の特徴であるといえよう。黒澤の天然農法のコスト計算は次のようなものであった。米1升95円で「労力代を含めて、投下した資本は回収される」が「農薬を使わない米だというので、東京から1升180円で買いにきている」ので、農協への供出分は収量60俵のうち5俵程度で済むという<sup>29)</sup>。つまり、無農薬という付加価値によるコスト回収という考え方である。その場合、会員組織や独自販路という仕組みではなく、高品質

という一般市場原理に立脚している点が特徴である。

黒澤農法の第5の特徴は、食材に関する思想である。現代の用語でいう「地産地消」の健康法ともいべき考え方が示されている。つまり、「人間は、その地域でできたものを食べているのが最も健康によい<sup>30)</sup>というものであり、あるいは「生態学の考え方<sup>31)</sup>とも表現している。つまり、生態系の一環として人間の生存・健康状態があるのであるという思想である。

黒澤農法の第6の特徴は、徹底した経験主義である。黒澤は、老人の知恵を重視し、「農法については、その土地で最も適したものが、何百年にわたって形成されたものである」とか、「健康にもよく、作物に最も適した方法が、何百年間の人間の知恵の集積の結果である筈だ」と述べている<sup>32)</sup>。ここには、適者生存（進化論）と適者棲み分け（今西進化論のような）とをあわせもった思想が表現されている。それは、新宗教に特徴的な生命尊重や共生思想とは異質な前提に立っているといえよう。それは、時間的経過のなかで淘汰されてきたものの価値を重視するという意味で保守主義であり、各地の篤農家の経験知の聞き取りの集大成としての黒澤の天然農法の特徴をよく表している。

第7の特徴としては、黒澤農法が黒澤浄自身の人格や思想性と不可分の関係にあることを挙げる必要がある。これは、滝沢研究員の評価として「氏自身の発明にかかわる農機具もあるが、氏は特許を取らない<sup>33)</sup>とか、「黒沢氏がけっして資本主義社会の批判者とは思われない。しかし化学肥料への批判は、氏の農法からでてきたものである<sup>34)</sup>といった点に関わっている。

黒澤の思想性を端的に表現しているのは、滝沢研究員のレポートの末尾に収録された黒澤農法の「考え方・勘どころ」（都々逸）である。そこに貫かれている思想を整理するならば、市場経済を肯定したうえで実証的な研究、自給自足の精神、公共的利益の追求という3つの特質を析出することができる。例えば、貨幣・市場経済の肯定という面では「六円五十銭昭和の五年、今じゃお米は八千円<sup>35)</sup>というように米の市場価値を肯定している。ここには農業の商業化に対する根源的な批判は不在である。また実証的な研究姿勢としては、「ひまなこたつも考えようで、研究するなら農繁

期」<sup>36)</sup>という都々逸は、信仰に基づく独自農法ではなく、自らの観察・経験・実証による農法であるという特徴をよく表現している。さらに自給自足の精神については「利息いらずの手足の資本、自給自足もおてのもの」<sup>37)</sup>という都々逸は、労働集約型農法による生産手段の面での市場経済からの自立性の確保という姿勢をよく物語っている。つまり、生産過程においてできるだけ市場経済から自立しつつ、生産物の価値の実現の面では市場経済に依存するという立場である。その意味で、完全な自給自足ではない。最後に、黒澤農法の公共的側面については「田畑こやして増産するは、一つは身のため国のため」<sup>38)</sup>という都々逸に示されているように、農の繁栄は私的利益とともに公共的利益に合致するという思想である。

#### 4. 農業近代化の枠外にある民間農法の再評価

日本近代農業史研究における民間農法の再評価に取り組んだ第一人者は、中島紀一である。中島は、埼玉県出身で、東京教育大学大学院を修了し、同助手、農民教育協会「鯉淵学園」教授をへて茨城大学農学部教授になり、退職後の現在は有機農業技術会議理事長をつとめている。著書に『有機農業の技術とは何か』(2013年)などがある。中島は、1995年に「昭和戦後期における民間稲作農法の展開」(『農耕の技術と文化』第18号)を発表し、1960-70年代に刊行された農林水産省主導の「日本農業発達史」の叙述の問題性を「民間技術の軽視」にあると指摘する一方で、古島敏雄や川田信一郎の農業史研究を、1950年代に編纂された『日本農業発達史』の視点を継承するものとして位置づけたうえで、「民間の下からの主体的動きと結びついた近代化の推進」という視点をもって「民間稲作法」として長野県の萩原豊治の保温折衷法や山形県の田中正助の分施肥法に注目したことを高く評価した<sup>39)</sup>。ちなみに、古島敏雄は、長野県飯田市出身で、東京大学農学部教授・一橋大学経済学部教授併任し、専門は日本経済史・農業史である。それにもかかわらず、中島は、古島・川田の視点が「農業近代化」すなわち、化学肥料・薬品、工業化資材・機械を活用することを重視するという意味での「近代化」を無批判に前提としている点に疑問を呈している。中島によれば「農業近代化」の

モデルが過去のものとなっていくなかで、「民間稲作農法の過去のなかに古島、川田両氏の位置づけ—いわゆる民間技術も近代化を構成する一要素として近代化過程に包摂されるという理解—からはみだし、それを越えるような動きが存在しなかったのか」という問いが浮かび上がってくる」という<sup>40)</sup>。具体的にいえば、萩原式の保温が油紙やビニール材による被覆を不可欠とし、田中式の分施肥が化学肥料を前提としている以上、これらの民間農法には農業の近代的商品経済への依存志向を読み取ることができるだろう。このような「農業近代化」モデルへの民間農法の「包摂」という当時の歴史の見取り図に対して、中島独自の問題意識は、昭和戦後期の農業技術開発において「農業近代化」モデルの枠外にあった民間農法の系譜に着目することが必要だと主張するものであったといえる。その際、中島が注目したのが、寒冷地型稲作法の代表としての黒澤式稲作であり、熊本の松田式、滋賀の島本式であった。この中島の研究は、いわば「農業近代化」モデルへのオルタナティブの提示と位置づけることができる。あるいは、中島本人の後代での表現を用いるならば「有機農業」による1950年代の民間農法の掘り起こしに「呼応しようとしたもの」であったのである<sup>41)</sup>。

それでは、中島は黒澤浄の農法についてどのような評価を与えていたのかを次に確認しておきたい。第1に、中島は、黒澤農法の社会的影響の射程について、黒澤の著書『改良稲作法』(1948年)を「農民自身が著した近代的稲作技術書としては出色のもの」と高く評価し、その成果に関して「寒地においては成功例も多かったようだが、暖地にはなかなか適応できず、また、労働多投・技能型、自給資材活用型であったため、労働力流出と購入資材優勢の情勢下で、1950年代末には実践者を失っていった」と指摘している<sup>42)</sup>。中島は、黒澤氏の経歴についても紹介しており、彼が1835年以降、篤農家として稲作指導をはじめ、周囲に「瑞穂会」という農事団体を組織していたこと、その後、1848年に天産自給を掲げる大本教が組織した農事研究団体「愛善みずほ会」の会長に篤農家として招聘されたものの、内部での批判を受けて1950年に会長を辞任して以降、黒澤個人を中心とした「瑞穂会」および「黒沢先生後援会」を組織化していたことを伝えている。ただし、1962年に

稲作指導に関する黒澤の記録（日誌）が途絶えたことを挙げて、「1970年代以降の晩年には無農薬無公害稲作を提唱した」とはいえ「社会的存在としての黒沢式稲作は1954年で一応のピリオドが打たれたと考えて良いようだ」と結論づけた<sup>43)</sup>。ちなみに、中島が依拠している日誌とは、『五十年の歩み—私の米作り—』と題する黒澤浄自筆の日誌<sup>44)</sup>（黒澤浄1980）のことだろう。現在、この日誌は遺族から丹野喜三郎に寄贈されている。しかし、丹野喜三郎によれば、丹野本人が1980年に黒澤氏を訪問し直接農業指導を受けたと証言している。当時、39歳だった丹野が福島県からわざわざ長野県の黒澤のもとを訪ねたのは、かねてから黒澤について耳にしていたからであったという。したがって、黒澤農法の社会的影響の射程は、従来、研究者が推測してきた以上に大きなものであったと考える必要があるだろう。

第2に、中島は、黒澤農法の実践者の衰退の原因について、黒澤の施肥法が技術的に優れたものであったにもかかわらず実践者を失った原因として2つの要因をあげている。第1に、田中式の分施肥と比べ「化学肥料主義の社会体制」に適合しなかった<sup>45)</sup>という点である。しかしながら、黒澤自身も化学肥料の一部の活用を容認していたことを想起すれば、この要因についても精密な分析が必要であろう。例えば、黒澤は「化学肥料の施用法」として「化学肥料をつかうときは、必ず焼土や乾土にまぜて、一昼夜くらい発酵させてから施せというが、焼土は必ず冷えてからつかうこと。また全然湿りがなくてはハッコーしない」と述べていた<sup>46)</sup>。第2に、中島は、民間農法で強調されていた「体系的な思想性」の問題性を指摘し、技術普及という点で「制約条件として働くことが少なくなかった」と総括している<sup>47)</sup>。あれこれの民間農法が農業者の体系的な思想性と結びついている点について「技術」重視の観点からの否定的な評価がなされているといえるのであるが、逆に、農業実践者自身の思想性、独自の世界観抜きに「農業近代化」のオルタナティブになりうる民間農法が成立したのかと問い返すならば、はたして民間農法の思想性は「制約条件」となったのかどうか再吟味する必要がある。

その後、黒澤について言及した最新の研究論文を書いたのは原直行である。原は、高度経済成長

期以前の民間稲作法を検討する中で、川田・早川調査（1953年）、御園・川田調査（1954）などに依拠して、黒沢式稲作法についても検討している。原によれば、1940年代前半から50年代後半にかけて民間稲作法は、当時の社会経済条件、農業技術条件のもとで普及したが、それらの諸条件が高度経済成長によって失われるとともに、民間稲作法も急速に衰退したと総括している。しかし、中島紀一に言及しつつ、いったん「捨て去られた技術が別の条件によっては、その意義が見出され、再評価されることもありうる」と論じ、「技術史研究」の重要性を主張している<sup>48)</sup>。

## おわりに

丹野喜三郎が移住先として長野県を選んだのは偶然ではなく、氏が若い時に生前の黒澤浄氏から「天然農法」を伝授された記憶が、その動機の一つになっている。中島は、1954年に黒澤式農法の社会的影響力は失われていたとみなしたが、黒澤式は1970年代初頭に無農薬農業への社会的注目という文脈において再び脚光を浴びていたのである。しかも、黒澤式が影響力を持続させていた根拠は、その独自の技術的側面というよりもその技術的側面の根底にあった独自の世界観・思想性にあったと考えて良いだろう。1950年代には黒澤農法に対する様々な批判的な考察がなされたが、多くの場合、その農業技術の一定の合理性を認めつつも、黒澤自身の指導法については厳しい批判がなされていた。そこには、農業指導をめぐる系統機関（農林省-農業試験場）と民間篤農家とのあいだでの指導権をめぐる確執が影を落としていた。1950年代から1960年代にかけて時代の価値観が、「近代化」以前の労働集約性の重視から高度成長期に向かって労働生産性の重視へと変化する中で、黒澤農法がどのような社会的評価を受けてきたかについては、黒澤の国会での参考人証言を含め、別途、検討を要する課題である。また、黒澤が1948-1950年に会長をつとめた「愛善みずほ会」との関係の解明についても今後の重要な課題である。少なくとも大本側の認識によれば、「長野県で瑞徳会を主宰し米作りの篤農家として知られた黒沢浄と、愛善苑の農事面を担当していた出口新衛とのあいだに協力提携の話がまとまり、さらに梅村登・島本覚也・伊藤善三らの増産技術指導者の参加をえて、

食糧の増産・自給運動をかぎられた信徒間の運動でなく、全国民的運動として展開するため、あらたに愛善みずほ絵画設立されることになった<sup>49)</sup>という。それゆえ、愛善みずほ会を旧大本の愛善苑と同一視することはできないが、逆に黒澤側の史料の発掘により「七十年史」での認識を検証する必要もある。また、1950年代の黒澤の動向として興味深いのは、昭和30(1955)年に黒沢浄先生後援会が発行した『瑞穂』第38-40号に小林次郎が「文民の話」を寄稿している点である<sup>50)</sup>。小林次郎[1891-1967]は、長野県上水内郡高岡村(現飯縄町)出身の司法官僚で、戦前は貴族院書記官長をつとめ、戦後は新憲法下で初代参議院事務総長をつとめた。戦前戦後の高級官僚がどのように黒澤と関係をもっているのかについても今後の検討課題である。いずれにして、本論で明らかになったことは、黒澤農法の持続性は、黒澤氏の思想性と不可分の関係にあったということである。したがって、民間農法を農業技術的な側面から分析することは重要な課題であるとはいえ、農業技術そのものが広い意味での文化史の一要素であり、時代の価値観に規定されていることを考慮するならば、民間農法の総体的な歴史的評価のためには、あれこれの農法の実践者の思想性や生活実践の全体性を射程に入れて分析することが不可欠なのである。

謝辞：本論は、長野大学地域連携センターの連続講座「郷土の先達—黒澤浄を読む」の成果の一環である。本論を準備するにあたって講座の共同運営者である丹野喜三郎さん、長野大学環境ツーリズム学部の相川陽一先生に資料提供・助言の面でお世話になった。ここに記して深く感謝申し上げる。

## 注

- 1) 中島紀一「昭和戦後期における民間稲作農法の展開」『農耕の技術と文化』第18号、1995年、5頁。
- 2) 黒澤浄『五十年の歩み—私の米作り—』(日誌)、1980年。丹野喜三郎所蔵。
- 3) 一楽照雄「図書すいせん 守田志郎著『農業は農業である』」『協同組合経営研究月報』第215号、1971年、71頁。
- 4) 館野廣幸「有機農家からみた日本の有機農業と関係する思想家たち」『社会科学論集』(埼玉大学経済学会)第136号、2012年、63頁。
- 5) 加用信文『農法史序説』御茶の水書房、1996年、6-7頁。
- 6) 守田志郎『農業は農業である：近代化論の策略』農山漁村文化協会、1971年、272頁。
- 7) 同上、273-274頁。
- 8) 同上、280頁。
- 9) 協同組合経営研究所「無農薬農業の事例をたずねて(続)」『協同組合経営研究月報』第215号、1971年、49頁。
- 10) 同上、58頁。
- 11) 同上、70頁。
- 12) 協同組合経営研究所「無農薬農業の事例をたずねて」『協同組合経営研究月報』第207号、1970年、85-115頁、同「無農薬農業の事例をたずねて(続)」『協同組合経営研究月報』第215号、1971年、44-70頁、より筆者作成。
- 13) 吉川勇一(2005)「滝田隆夫さんの逝去(2005/05/05掲載)」吉川勇一の個人ホームページ<http://www.jca.apc.org/~yyoffice/128TakitaTakaoSeikyo.htm> 2016年6月29日アクセス
- 14) 協同組合経営研究所「無農薬農業の事例をたずねて(続)」、58頁。
- 15) 同上、60頁。
- 16) 下里俊行『『ナロードニキ』概念の再考』『ロシア史研究』第60号、1997年、5-20頁。
- 17) 協同組合経営研究所「無農薬農業の事例をたずねて(続)」、61頁。
- 18) 協同組合経営研究所「無農薬農業の事例をたずねて(続)」、59頁。
- 19) 同上。
- 20) 同上、60頁。
- 21) 同上。
- 22) 同上。
- 23) 同上、61頁。
- 24) 同上。
- 25) 同上。
- 26) 同上、59頁。
- 27) 同上、62頁。

- 28) 同上。
- 29) 同上。
- 30) 同上。
- 31) 同上、61頁。
- 32) 同上、62頁。
- 33) 同上、60頁。
- 34) 同上。
- 35) 同上、20頁。
- 36) 同上。
- 37) 同上。
- 38) 同上。
- 39) 中島紀一「昭和戦後期における民間稲作農法の展開」、2頁。
- 40) 同上、3頁。
- 41) 中島紀一『野の道の農学論：『総合農学』を歩いて』筑波書房、2015年、58頁。
- 42) 中島紀一「昭和戦後期における民間稲作農法の展開」、4頁。
- 43) 同上、5頁。
- 44) 黒澤浄『五十年の歩み—私の米作り—』（日誌）、1980年。丹野喜三郎所蔵。
- 45) 中島紀一「昭和戦後期における民間稲作農法の展開」、24頁。
- 46) 黒澤浄『稲作夜話』愛善みずほ會、1950年、139頁。
- 47) 中島紀一「昭和戦後期における民間稲作農法の展開」、27頁。
- 48) 原直行「高度経済成長期以前の稲作技術の展開と民間稲作農法」『香川大学経済論叢』第75巻第1号、2002年、180頁。
- 49) 大本七十年史編纂会『大本七十年史』下巻、宗教法人大本、1964年、891頁。
- 50) 国立国会図書館憲政資料室「小林次郎関係文書目録」、2011年。[https://rnavi.ndl.go.jp/kensei/tmp/index\\_kobayashijiro.pdf](https://rnavi.ndl.go.jp/kensei/tmp/index_kobayashijiro.pdf) 2016年7月20日アクセス。
- 本)、国土社、1992年。
- 大本七十年史編纂会『大本七十年史』下巻、宗教法人大本、1967年。
- 小柳津勝五郎『増補改訂式倍収穫天理農法』実業之世界社、1915年。
- 折戸えとな『提携』における“もろとも”の関係性に埋め込まれた『農的合理性』：霜里農場の『お札制』を事例として『環境社会学研究』第20号、2014年、133-148頁。
- 加用信文『農法史序説』御茶の水書房、1996年。
- 川田信一郎・早川孝太郎『稲作民間技術の種類と分布』（農業技術の普及浸透のための諸調査の内地方技術の調査研究 No.1）農業技術協会、1953年。
- 木村武史「自然農法思想：福岡正信の場合」『筑波大学地域研究』第33号、2012年、53-70頁。
- 木村武史「サステイナビリティと自然農法：福岡正信の場合」『宗教研究』86巻4輯、2013年、359-360頁。
- 協同組合経営研究所「無農薬農業の事例をたずねて」『協同組合経営研究月報』第207号、1970年、85-115頁。
- 協同組合経営研究所「無農薬農業の事例をたずねて（続）」『協同組合経営研究月報』第215号、1971年、44-70頁。
- 栗林農夫『ヤロビの谷間：下伊那のミチューリン運動』青木書店、1953年。
- 黒澤浄『五十年の歩み—私の米作り—』（日誌）、1980年。丹野喜三郎所蔵。
- 黒澤浄『改良稲作法』愛善みずほ會、1948年。
- 黒澤浄『稲作夜話』愛善みずほ會、1950年。
- 黒澤浄「参考人証言・食糧増産に関する農業技術改善について参考人より意見聴取に関する件」『第9回国会衆議院農林委員会議事録』第6号（昭和25年12月6日）、1950年。
- 国立国会図書館憲政資料。2011年。「小林次郎関係文書目録」[https://rnavi.ndl.go.jp/kensei/tmp/index\\_kobayashijiro.pdf](https://rnavi.ndl.go.jp/kensei/tmp/index_kobayashijiro.pdf) 2016年7月20日アクセス。
- 近藤正「黒沢式稲作法是非」『富民』第22号第4巻、1950年、47-51頁。
- 塩見友之助編『山と森：国民福祉の基盤としての』大成出版社、1973年。
- 下里俊行『「ナロードニキ」概念の再考』『ロシア

## 参考・引用文献

- 一楽照雄「図書すいせん 守田志郎著『農業は農業である』」『協同組合経営研究月報』第215号、1971年、71頁。
- 江口武正『村の五年生：農村社会科の実践』（新装

- 史研究』第60号、1997年、5-20頁。
- 館野廣幸「有機農家からみた日本の有機農業と関係する思想家たち」『社会科学論集』（埼玉大学経済学会）第136号、2012年、61-68頁。
- 田村猛「黒沢式稲作法に対する考察」『農村』第29巻第3号、1951年、5-7頁。
- 丹野喜三郎「日本の農業を放射能から守る会 福島を離れた有機農家」『食品と暮らしの安全』第271号、2011年、8-9頁。
- 築地文太郎『農村革命』中央央論社、1964年。
- 徳永光俊「日本農学の源流・変容・再発見：心土不二の世界へ」、田中耕司編『岩波講座「帝国」日本の学知 第7巻 実学としての科学技術』岩波書店、2006年、18-59頁。
- 友田清彦「明治初期の農業結社と大日本農会の創設(1)：東洋農会と東京談農会」『農村研究』（東京農業大学農業経済学会）第102号、2006年、1-14頁。
- 中島紀一「昭和戦後期における民間稲作農法の展開」『農耕の技術と文化』第18号、1995年、1-32頁。
- 中島紀一『野の道の農学論：『「総合農学」を歩いて』筑波書房、2015年。
- 西尾敏彦「農業技術を創った人たち：昭和の技術者群像」、田中耕司編『岩波講座「帝国」日本の学知 第7巻 実学としての科学技術』岩波書店、2006年、61-97頁。
- 西村あさき『黒澤浄翁指導るばなし・いねつくり』愛善みずほ會、1949年。
- 日本有機農業研究会『有機農業ハンドブック』農山漁村文化協会、1999年。
- 原直行「高度経済成長期以前の稲作技術の展開と民間稲作農法」『香川大学経済論叢』75巻1号、2002年、141-182頁。
- 平賀明彦「戦時と農本：ある農本主義者の軌跡を辿って」『白梅学園大学・短期大学紀要』第47号、2011年、47-63頁。
- 平瀬実武「世界の有機農業の系譜とわが国当面の課題」『協働組合経営研究月報』305号、1979年、40-51頁。
- 藤原辰史『ナチス・ドイツの有機農業・新装版』柏書房、2013年。
- 藤原辰史『稲の大東亜共栄圏：帝国日本の〈緑の革命〉』吉川弘文館、2012年。
- 古田睦美「上田モデル—市民事業ネットワークによる地域づくり」『社会運動』第415号、2014年、57-60頁。
- 古島敏雄「農民的農法の完成と研究者の協力」『日本科学技術史大系 第23巻農学2』第一法規出版、1970年、329-364頁。
- 御園喜博・川田信一郎「黒沢式稲作法の特色とその普及条件」『農業経済研究』第26巻第3号、1954年、145-162頁。
- 南田正児「提携：日本有機農業運動に特徴的な生産者・消費者関係 第1部」『千葉大学園芸学部学術報告』第49号、1995年、189-199頁。
- 守田志郎『農業は農業である：近代化論の策略』農山漁村文化協会、1971年。
- 矢坂雅充「東日本大震災・福島原発事故からの復旧・復興の今(6) 福島県からの天然農法の移転：丹野喜三郎さん」『農村と都市をむすぶ』（全農林労働組合都市と農村をむすぶ編集部）第64巻11号、2014年、70-73頁。
- 保田茂「有機農業論の背景と論理(1)」『神戸大学農業経済』第13巻、1977年、1-30頁。
- 吉川勇一「滝田隆夫さんの逝去(2005/05/05掲載)」吉川勇一の個人ホームページ<http://www.jca.apc.org/~yyoffice/128TakitaTakaoSeikyo.htm> 2016年6月29日アクセス。
- 吉岡金市、松丸志摩三「黒沢式稲作法の解剖」『若い農業』第5巻第6号、1950年、13-22頁。
- ロデイル、J. I. 『有機農法：自然循環とよみがえる生命』一楽照雄訳、農山漁村文化協会、1974年。
- 和歌山章彦「有機農家、新天地耕す：福島から長野へ 土作り伝える」『日本経済新聞』2015年10月25日付朝刊。